

農業・農村地域の合意形成を支える人材育成に関する ワークショップ型実習の実践研究

Practical research on workshop-based practical training on human resource development to support consensus building in agriculture and rural areas

森本 英嗣*・野村 廉士**・岡島 賢治*

Hidetsugu Morimoto, Yasushi Nomura and Kenji Okajima

1 はじめに

農業土木学の実践の場では、農家、水土里ネット、行政、設計・建設事業者など多様な主体が意見を調整しながら物事を進めていく場面が多い。近年、関係人口の創出や都市部からの移住など、農村地域ではより多様なステイクホルダーが生活・生産活動を行っている。ワークショップ（以下、「WS」）は多様な意見を整理し、多数決ならぬ「多様決」による合意形成をはかることで地域の主体的な運営の手法として有効である。三重大学農業土木学教育コース（以下、「当コース」）のJABEEプログラムでは、「チームで仕事をする能力」への取組みとして農村ワークショップ運営実習（以下、「本実習」）を平成30年度より開講している。本実習は、各テーマに沿ってチームでの共有と共感、提案と合意などの実践を重ねることでファシリテーション技術の修得を目指している。本稿は、これまでの本実習の実績を紹介する。

2 実習の内容と実施方法

本実習は、「多様な他者の有する多様な意見の必要性・重要性への気づき」、「他者との相互理解への手法の習得」、「他者との協働によるプロジェクトの企画と実践」を学習到達の目標と位置づけている。本実習は、3年次生対象の科目（後期開講）である。2019年度までは選択科目として開講してきた。2020年度以降（現在に至る）は、当コースの必修科目として開講している。実習の前半は、学生自身が参加者となり、合意形成、チームビルディング等の対話型WSを体験し、発言しやすい場づくり、傾聴、対話の技術と効果を学習する。学習した技術を用いて、農村社会における課題の整理と解決に向けたWSをファシリテーター（輪番制）と参加者に分かれて実践する。実習の後半は、地元の小学4年生に農業や農村、水の大切さを伝えるための環境学習の教材づくりを行い、創作型WSを実践する。限られた期間内で、伝えるべき内容の選定、授業のやり方などの提案・合意、教材の企画・作成、授業実施までの一連をチームで実践する。

本実習はレポートを課していない。そのため、履修生には修得すべき技術としてルーブリックを予め提示し、各実習後に自己点検を行ってもらおう。点検するスキルは、発言しやすい場をつくるスキル、傾聴スキル、発問スキル、合意形成を促すスキルとしている。

3 これまでの実績

当実習は3部構成となっており、①WS体験からファシリテーション技術の効果を学習し、身につけたファシリテーション技術を活かして②農村社会の課題とその解決策を考える対話型WSを実践する。最後に人に伝える方法・技術を身につけるため、③小学生向けの環境教育

*三重大学大学院生物資源学研究科（Graduate school of Bioresources, Mie University）

**宮川用水土地改良区（Midori-net Miyagawa Yosui）

キーワード：ワークショップ、ファシリテーション、傾聴、合意形成、環境教育

教材をテーマ決めから教材づくりまでを創作型WSで実践し、小学校にて出前授業を実施する。

3.1 ファシリテーション技術の学習

本実習は、当コースと三重県農林水産部との学官連携の一環で開講している。実務者（技術系公務員）による農業農村整備事業（ほ場整備）で実際にあった換地や交換分合等による調整事案テーマのほか、国民的アニメや身近にある風景を活用したチームビルディングWSを体験しながらファシリテーション技術の効果を学習している。事業遂行や組織運営等で重要となる合意形成に必要な「多様決」のための傾聴や発言の場づくりのスキルの修得を図っている。

3.2 農村社会の課題とその解決策に向けたWS

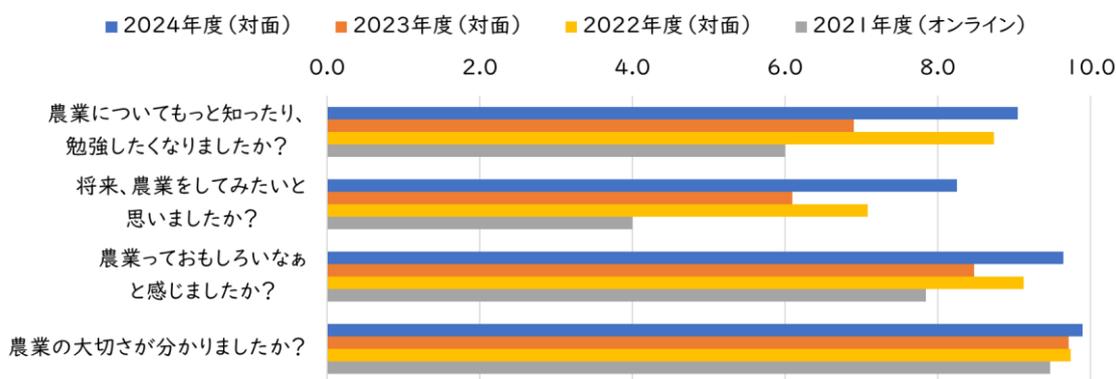
2020年度から2023年度は、コロナ禍の期間ではあったものの、立梅用水土地改良区（三重県多気町）を視察し、立梅用水を中心とした農業・農村の多面的機能の紹介や地域づくりの様子を学習した。それら情報をもとに、年間を通して立梅用水やその周辺に足を運んでもらえるようなイベントや企画の立案を目的としたWSを実施してきた。ここでは、実際の農村課題に対する意識の醸成を図りながら、対象課題の優先順位の決定や解決策の意見出し（発散）から収束までのブレインストーミング、提案内容のまとめ（合意形成）の過程を実践している。

3.3 小学生向けの環境教材づくりと情報伝達技術の習得

次世代への農業土木教育という位置づけで、小学生向けの環境教育教材づくりをWSで実践している。農業や農村、水の大切さをテーマに、小学生に詳しく学んでほしい内容をチームで発案し伝達方法（授業形式、アクティビティ、寸劇など）をそれぞれ決定する。小学生との距離を縮めるためのアイスブレイクや、大学で学習してきた内容を小学生に分かりやすく解説する工夫などを、WSを展開しながら創作する過程を実践している。

4. まとめ

本実習は、PBL（課題解決型学習）として約4ヶ月（10月～1月）で実施している。農村現場を学生自身が体感し農村課題の意識醸成につながり、農業土木学分野の技術や科学的知見を次世代に伝達する良い機会となっている。また、小学生の農業に対する意識の変化や学修意欲の向上にも貢献している（図1）。今後は、農業土木業界に就職した本コース卒業生を対象に、実働社会において本実習の経験がどのように活かされているかを検証していく予定である。



質問：「とても思う」を10点、「ぜんぜん思わない」を0点として自身の感想・気持ちを教えてください。

図1 出前授業を受講した小学生の感想（2021年度～2024年度）
（対面：対面授業，オンライン：zoomを用いたオンライン授業）

Impression of elementary school students on the outreach program between 2021 and 2024